



Humanity & Nature Newsletter

No.43

July 2013

地球研ニュース



ミャンマーはヤンゴンの串焼き屋台。屋間は静かな路地も夕方になるとところ狭しと屋台が並び、そこかしこでミャンマービールを酌みかわす姿が見られ、一日の疲れを癒す憩いの場所へと変身を遂げる
(撮影:高木 映)

今号の 内容

P2

特集1●日文研×地球研 座談会
人文学がみる文化・社会・環境
—たとえば「おっさんはなぜ
きれいな女の子が好きなのか」について
井上章一+稲賀繁美+
阿部健一+鞍田 崇

P6

特集2●座談会
〈ことば〉から考える地球環境学
【フィールドワーク編】
藤原潤子+石山 俊+市川光太郎+
濱崎宏則+寺田匡宏

P9

■ 百聞一見—フィールドからの体験レポート
零細漁業の実情から資源管理の
あり方を考える
岡本侑樹

P10

特集3●EPM勉強会 活動報告
地域と社会科学にもとづく
環境学の構築
ウアル・アイスン

P11

■ 出版しました
『人間科学としての地球環境学
—人とつながる自然・自然とつながる人』

P12

■ 前略 地球研殿—いま、こんなことをしています
探求に普及をプラスして
辻野 亮

P13

■ 所員紹介—私の考える地球環境問題と未来
メガ都市空間のあり方を探る
内山愉太

P14

■ お知らせ
イベントの報告、研究活動の動向、
研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)、
研究活動の成果

人文学がみる文化・社会・環境

たとえば「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」について

出席 ●井上章一(日文研副所長・教授) + 稲賀繁美(日文研教授) + 阿部健一(地球研教授) + 鞍田 崇(地球研特任准教授)

地球研では毎年、国際日本文化研究センター(日文研)と合同シンポジウムを開催している。いずれも人間文化研究機構の構成機関であり、かつ同じく京都に所在する。昨今の地球環境研究では、社会連携がさかんに議論されるようになってきているが、文化的側面についての認識は十分な深まりを示していないように思われる。日文研はいうまでもなく、文化理解のあり方を探求するプロ集団だ。両機関の「語り手」が集い、学問と社会の関係、人文学と環境学の連携のありようをざっくばらんに語りあった。

鞍田●地球研と日文研は、合同シンポジウムをすでに5回開催しています。まず、これまでの企画へのご意見やご感想からうかがいたいと思うのですが。

井上●私も稲賀さんも、この仕事にこれまで関わっていないのでよくは知らないのですが、講堂に市民を300人、400人集める催しでは研究が深まることにはなりにくいかもしれませんね。

鞍田●稲賀さんは、「こんなものがあったのか」という顔をされています。(笑)

稲賀●知ってはいるけれど、声はかからなかったというのが正直なところ。市民サービスという言い方はよくないけれど、そういうことを最低限やらないと地域に認められないことになりかねない、ということでしょうか。

阿部●稲賀さんは慎重に、「サービスという言い方はよくないけれど」という言い方をされましたが、環境学というのはまさにそう。つまり、研究者が一般の人に教えるというサービスではなく、一緒に考えるようにしないといけないと思っています。

井上●象牙の塔の学問ではなく、医者が患者に向きあうようなイメージでしょうか。ただ、患者さんだと、からだを治してほしいと医者にすがりつくんですが、知識がほしいと研究所にすがりつく市民がどれだけいるかは疑わしい。(笑)

鞍田●そうですね。求められている知識とはなんぞや、ということでもあると思う

日文研・地球研 合同シンポジウムの実績

●プレ開催
2008年6月21日(土)
京都産業会館シルクホール
「山川草木の思想
——地球環境問題を日本文化から考える」

●第1回
2009年5月9日(土) 日文研講堂
「京都の文化と環境——水と暮らし」

●第2回
2010年5月22日(土) 日文研講堂
「京都の文化と環境——森や林」

●第3回
2011年5月21日(土) 日文研講堂
「環境問題はなぜ大事か
——文化から見た環境と環境から見た文化」

●第4回
2012年9月14日(金) 日文研講堂
「文化・環境は誰のもの？」

のですが。

「町衆と学問はともにある」 は幻想か

阿部●地球研は、地球環境問題の根っこは文化の問題だと考えている。口癖のようにそのように言っているが、じつは文化についてなにも知らなくて、「文化だよな、問題は」と言って逃げている。

稲賀●ひと口に文化といっても、東京都行政の関係者が言っているものと、京都で街の人たちが言っているものとは、ずいぶん違っている気がしますね。井上さんの言うように、医者と患者というメタファーのような面もあるけれど、京都ではむしろもっと積極的な市民の参加、つまり「寄りあい」のようなかたちがあった。人が集う場があったら、そこになんとか得身のしれない人がきてワイワイやっているというような……。

鞍田●その話は、研究者同士と、研究者と市民との関係の二つの方向に展開できそうですね。日文研も地球研も共同研究として、いろいろな人を巻きこんでいて、それこそ寄りあいの的に研究するところに

意義を有しています。それをさらに拡張して、研究者だけではなくて、社会も巻きこもうという点がもう一つです。

井上●私も、共同研究は心地よいサロンであってほしいと思っているので、選挙演説みたいな声を出すような集いはいやだな。「ぜひ、わか研究の成果に一票を」とか、そういうのはなるべく避けたい。人が大勢集まると、そういう声をあげる研究者もでてくる。

阿部●サロンや寄りあいの的な研究スタイルは京都のもの、という印象が強い。分野の違う人が好き勝手にどんどん発言する。街の規模とか歴史も関わっているとしますね。

稲賀●外国の例をあげれば、たとえばパリ。わりと近所づきあいのネットワークが四通八達していて、ノーベル賞をもらった人とホームレスがいっしょに話ができる。それが「レピュブリック」なわけです。パリにはそんな雰囲気はまだ残っている。ドイツは、一つの都市はだいたい10万人規模ですから、市長さんは知りあいだとかたちで、かつこつきの「ビュルガー(市民)」という意識が浸透している。

鞍田●京都の街場には、そういったものが息づいていると考えていいんですか。

井上●京都の町人たち、とくにお金で苦労しない町人たちは、いろいろな道楽をする。普請道楽、着道楽、食道楽、下品なものだと女道楽。そのなかに、知識道楽みたいなものがあつた。ちなみに、大阪にも知識道楽はあつたんです。大阪の商人のなかからも、日本の学問はでてきた。その町人的な学問を大学という仕組みがつぶしたんじゃないかと思っています。

林屋辰三郎*1先生なんかは、「町衆と学問はともにある」という幻想を生きた人でしたが、率直に言って日文研なんかはそういうものをたたき壊す側にいる、大学と文部科学省当局と同じ穴のムジナだと思う。民博(国立民族学博物館)や地球研も同じとちやいますか。

*1 はやしや・たつさぶろう、1914-98年。歴史学者。立命館大学教授、京都大学人文科学研究所教授、京都国立博物館館長を歴任。日本の芸能史研究の第一人者。さまざまな研究会を立ち上げ、共同研究の場を構築しつづけたことも知られる。著作は『中世芸能史の研究』ほか。

*2 1885-1962年。20世紀物理学の巨匠。量子論によって原子構造を解明し、自然理解に大変革をもたらすとともに、第2次大戦時には、連合国の核兵器開発に関与し、科学が人類におよぼす影響についての考察を深める。冷戦時には、科学者の社会的責任について国際政治の場でも発言し、注目を集めた。

(左奥から時計まわりに)
 いのうえ・しようち
 専門は建築史、意匠論、日文研副
 所長・教授。二〇一三年から現職。
 いなが・しげみ
 専門は比較文学比較文化、文化
 交流史。日文研教授。二〇〇四年
 から現職。
 くらた・たかし
 専門は哲学。研究推進戦略セン
 ター特任准教授。二〇〇六年から
 地球研に在籍。
 あべけんいち
 専門は環境人類学、相関地域研究。
 研究高度化支援センター「ミニ
 ケン」部門長、教授。二〇〇八
 年から地球研に在籍。



同床異夢に生きる学者と町衆

阿部●いっぽうで、環境学は町衆と学者とがともに考えるべきステージにきています。最近はそのトランスディシプリナリティという言い方で表現している。

井上●環境問題に関しては、困ったことだと思つた町方まちかたの人たちが、「だれか詳しい先生はいないのか」と探して呼んで、お互いに意見を交わすということはあるよね。たしかに、そこに可能性はあるんだと思います。

阿部●稲賀さんがフランスとドイツの例を出されましたが、それぞれのトランスディシプリナリティはおそらくあるのでしょう。だとしたら、日本あるいは京都ならではの形を考えることができるのではと思うのですが、どうでしょう。

稲賀●正直いえば、私はお座敷がかかった場は大嫌いです。関係が最初からセットされていて、エライセンセからのご意見拝聴みたいになる。

井上●でもね、招くほうの町方も、そんなにエライ人に来てもらったとは思ってなくて、わりと冷めた目で見ていますよ。(笑)町方にとっては、「芸妓遊びにあきたから、次は知識遊びをしようやないか」というていどの話。芸妓の踊りを品さだめするように、文人たちのしゃべることについて、「あいつの話は値打ちないな」というような集いだった、もとはね。でも、そこを切り離して、象牙の塔をつくってしまった。環境という突破口から、大学に巣くっている人たちをもういちど芸妓なみに——といったら芸妓に失礼なんだけれども、座敷がかかって品さだめをされるような、そういう場でかわされる学問はあつていいのかもしれない。

稲賀●ただね、座敷がかかったとしても、むかしだったら多くつたつて100人でしょう。井上●人数の規模がK点をこえると、スピーチは演説になるし、受けねらいになる。たしかに、腹をわって話しあうとい

うのは、規模の制限があるよね。

サロンに社会を変える力があるのか

鞍田●環境学で現在試みられている社会連携は、サロンや座敷という言葉で表されるような雰囲気はなくて、どこか身構えたイメージがあります。でも、求められているのは、もっと緩やかというか、しなやかな形ではないかという気がするんです。

稲賀●いわゆる「サイエンス」では、新しい発見ができるのは25歳くらいが限度ですね。ということは、25歳までの経験でなければできないものが一つの模範になって、それを社会に広げようとなるのではないのでしょうか。もちろんサイエンティストのなかにも、たとえばニールス・ボーア^{*2}のようにノーベル賞的発見のあと、いわば社会のコーディネータみたいに関係を変容させた人もいますけれど。

阿部●いまではサイエンティストも、サイエンスコミュニケーションのように一般の人びとの関わりを試みているけれど、まだまだ少数。とくに若い研究者は、たとえばこういった談話会に出てくれといつても、そんな時間はありませんよと、自分の武器を磨くほうにいつてしまう。

井上●学界すごろくの「あがり」みたいなものに囚われているあいだは、研究者の側が芸妓遊びのようなサロンを楽しめないということではないでしょうか。

鞍田●それって、どのあたりであきらめるものなんですか。

井上●私ははじめから捨てています(笑)。「あほらしい」と思っています、そういうすごろくは。

稲賀●すごろくを捨てた人の存在は、無益かもしれないけれど、社会設計上は、じつは安全弁とみなしうるものですよ。

井上●たぶん、すごろくの「あがり」をめざしている若い人はサロンに寄らないと思うし、先生も、「君たちには20年はやい。

エラくなってから、サロン遊びをすればいいんだ」とおっしゃると思う。

ところが、エラくなった方は研究内容の説明を市民向けになさるとき、市民は数学とか化学式をぶつけられてもわかりませんから、わかりやすく言葉を組み立てようとされるでしょう。そのときに使われる、たとえば疑似社会学、疑似文化論に、ややもすればうさんくさいものがたくさんあるわけです。そこを見ぬける懐の深いサロンを、市民社会のほうでもはぐくんでいってほしいものですが。

鞍田●知的サロンは広い意味での教養、人文的素養といえると思います。いっぽうで環境研究では、具体的な社会変革をめざしているところがあるんですね。そこからすると、サロンの集まりが、社会を変える運動的側面をもつ可能性があるのかどうかに関心あるところです。

環境学における価値判断と風土

阿部●少し補足すると、認識科学から設計科学へという流れがあります。どうということかという、これまでは自然科学を中心にもっぱら事実命題を問うてきたわけです。「これは正しいのか、正しくないのか」と。そうではなく、とくに環境学は、これからは価値命題を問わなければいけない。あるかないかではなく、こうすべきだということを問うていかなければならない。

井上●なるほど。研究者の勇気というか、意気込みも問われる。だけれども、価値判断のさいに社会連携の場にて、そこでの支持をとりつけた研究者は、「おれだけじゃない。これだけの市民もおれと判断を共有してくれている」というように話をもっていきやすい。それは私が感じて

*3 平成24年度日文研共同研究「21世紀10年代日本文化の軌道修正:過去の検証と将来への提言」(代表:稲賀繁美)。

*4 日本の中世に行なわれた捨身行のひとつ。南方浄土の補陀落をめざして、小船に単身で乗りこみ南洋に赴くというもの。紀州那智勝浦の事例が著名。

*5 哺乳類のキヌゲネズミ科のなかまで、和名はタビネズミ。周期的に大発生と激減をくりかえすことが知られている。大発生して大移動するさいに大量の個体が死亡することから、集団自殺の例として引合いに出されることがある。

(次ページに続く)

人文学がみる文化・社会・環境

たとえば「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」について



地球研ライブラリー『人はなぜ花を愛でるのか』
日高敏隆・白幡洋三郎 編
2007年3月31日 八坂書房
同タイトルのシンポジウムを書籍化したもので、パネリストらによる論考を収録。考古学、人類学、遺伝学、生物学、美術史、文化史など、さまざまな視点から「花を愛でる」ことの意味が論じられている

いる、ややせつない方向、しだいに選挙運動に近くなる途なのではないかなという気がします。

鞍田●問題はそこですね。ただ、かつてサロンの担い手であった人文学そのものが、いま変わろうとしている傾向もある。稲賀さんの共同研究*3のテーマは、そのあたりに関わるものかと思うのですが。

稲賀●「軌道修正」ですね。既存の航路はダメだとわかっているけど、新しい航路もみつきりっこないんだから、とにかく船出してやろうと。

阿部●まるで補陀落渡海*4ですね。目標はあるけれど海図がない、あるいは、あると信じるわけで、いわゆるレミング*5の自殺とおなじようにも思える。われわれが「設計」といったとき、あるべき姿というのは、じっさいには存在していない。まだ補陀落でしかない。

稲賀●設計ということで、どういうことを考えていらっしゃるのでしょうか。

阿部●ものすごく単純に言えば、あらためて豊かさを問うことでしょうかね。高度成長時代の延長線上で右肩上がりでありまえたと思ってきたものが、今回の震災でもろくも崩れたように。

稲賀●和辻哲郎や寺田寅彦もいつているけれど、まさに地震が典型的で、人間が設計してうまくいったとしてもかならず裏切られるという考えが日本人には無意識的に残っている。欧米式の設計思想とは本質的にあいられない要素を、われわれはたえずどこかでひきずっている。

阿部●寺田寅彦は『日本人の自然観』*6で、自然観の違いが将来像や生き方の違いをもたらすのはあたりまえとしていますよね。そう考えると、環境学における価値判断もまちがいに、この風土から出てくるものであってしかるべきだと思う。

知識と行動をつなぐものとは

井上●日本的な環境研究がありうるのかどうかはわかりません。いずれにせよ、サイエンスが事実問題として掘りおこした

データに、善男善女はかならずしも従わないわけです。彼らは妙なことに怯えもするし、ほんとは怯えないといけないことに安心したりもする。科学者の目からみたら愚かにしか見えない部分もあるわけです。でも、そこを念頭におかなければ、そもそも設計なんてできないんですよ。人は設計者の思惑どおりに動くべきだという前提は、人間を相手に号令をだす以上、なりたないと思います。

阿部●このままいくと地球はダメになるというのは、知識としては老若男女みんなに拡がっているはずですが、知っていても、人びとは行動にうつさない。国際的な研究の枠組みでその点を追及しているグループ*7がいるのですが、彼らは知識と行動とをつなぐものとして、芸術をもちだすんですよ。

井上●日本的な芸術が隆盛するのは、応仁の乱から戦国にかけてのころ。つまり、世の中がいちばんすきんだときに花開くのが芸術。芸術を求めるといって学者がいるのなら、彼の意識のなかでは、世の中がすきんでいるということになっているんじゃないでしょうか。

阿部●社会がすきんだ結果としての芸術ではなく、もうすこし能動的に芸術が使えないでしょうか。問題を理解しているのに行動をおこさないという現実の前で、研究者がこれまででしっかり考えてこなかった側面として、芸術に代表される感性的な部分の役割が注目されているのかもしれないという意味なんですけれども。

井上●わかりました。でも、私は芸術だのみという考えは——そういう考えに陥る人の気持ちはわからなくもないのだけれども、存外たいしたことはないと思っています。たとえば、地球研の建物は美しくできていると思いますが、この建築芸術として美しい建物がみなさんの仕事にどれだけ肯定的に役だっているといえるん

でしょうか。

阿部●藁をもすがるといって感じではありますがね。(笑)

井上●ほんとうはすがってらっしゃらないでしょう。感性的な部分が人間にまったく影響しないとは言わないけれども、みなさんの論文を、この建築がどれだけ左右してきたかは、うたがわしい。かりに、なかなかいい研究ができないとしても、それはみなさん自身のせいなのであって、責任を建築になすりつけるわけにはいかないという気がするんですよ。

「人はなぜ花を愛でるのか」が問えるもの

鞍田●それこそ地球研の建物ができるとき、記念シンポジウム*8が国立京都国際会館で開かれました。日文研の白幡洋三郎さんと地球研の日高敏隆所長との共同司会で、テーマは「人はなぜ花を愛でるのか?」。花を愛でるって、べつに生存に必要なわけではないけど、だからこそ人間と自然の関わり方の原点ともいえる。持続可能性という言葉がまさにそうであるように、環境学ではともすると、生きるため、生き残るために不問のまま前提にされかねない。でも、文化の問題として理解するなら、それでは不十分ではないかと。

阿部●それがまさに日文研と地球研に共通する課題だと考えられたわけですね。

井上●「人はなぜ花を愛でるのか」はよいんです。市民の良識にもうけいられる問いかけです。でも、「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」は、明らかな厳然たる事実なんです、それを社会に投げにくいですよ。市民との連帯が難しいと思うところの一つです。

阿部●こんど投げたらどうですか(笑)。

井上●ほんとうの人文学は、世の批判を恐れず、すぐろくの「あがり」からは見ずられても、「わしはきれいな女の子が好きや」ということをつき詰めるいとなみだ

*6 明治から昭和初期にかけて活躍した物理学者、寺田寅彦の随筆作品。初出は1935(昭和10)年。「諸言」、「日本の自然」、「日本人の日常生活」、「日本人の精神生活」、「結語」の五章からなり、日本人の自然観について綴られている。

*7 IHDP(地球環境変化の人間社会的側面国際研究計画)において2011年10月から開始されたKLSC(知識・学習・社会変革アライアンス)のこと。

*8 人間文化研究機構 第4回公開講演会・シンポジウム/総合地球環境学研究所上質施設竣工記念「人はなぜ花を愛でるのか?」(2006年)

京都・徳正寺の茶室「矩庵」。徳正寺は市内中心部に位置し、赤瀬川原平、藤森照信らの路上観察学会の京都でのたまり場でもあった。矩庵の設計は藤森の手になる。価値観と美意識の共有に裏打ちされた、京都ならではのサロンの場と見られる。写真は、地球研がNHK文化センターで担当する講座のひとつ。住職の秋野等さん（右端）が点てる煎茶をいただきながら、和やかな歓談のひと時を過ごした



と思うんです。

鞍田●「人はなぜ花を愛でるのか」はよいが、それだけでは足りないという指摘は私もよくわかります。日文研で、「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」というようなフォーラムはされたことはあるんですか。

井上●フォーラムに向いていないと思うよ。阿部●そうですね。そちらは少人数の寄りあいやって、そこで組みたてたロジックを「人はなぜ花を愛でるのか」として大人数で……。

井上●無難な方向でね(笑)。

鞍田●でも、逆にいうと、寄りあいがなくなったことで、上ずみじゃないけれど、「人はなぜ花を愛でるのか」というような耳触りのよいテーマばかりになっているところがありますよね。

井上●無難だし、科研費でも通りやすいかもしれない。「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」では、そこらじゅうから閉めだされそうじゃないですか。

鞍田●そうなんですけどね、実は一般市民はそちらのほうが聞きたいんだと思うんです。

「毒」を積極的に評価する 視線の価値

井上●人文学には、人間の困った部分や暗い部分、業のようなもの、つまり人がふだん見たくないと思っているところも見すえるという使命があると思う。

阿部●「おっさんはなぜきれいな女の子が好きなのか」を、生物学者はDNAに還元して説明するのもかもしれないね。

井上●DNAで説明されると、きれいな女の子へのこだわりの深いところを説明されたようには思えない。なんかちょろまかされたような気がする。(笑)

鞍田●それはDNAだけではなく、宗教や信仰あるいは伝統でもない気がする。環境学で文化的な話になると、とかく宗教的背景や風土が持ち出されるんですが、

それはそれでキレイすぎる。

阿部●キレイすぎる、か。さきほど、人文学というのはドロドロした人間の深いところまで肉迫しているという話がありましたが、それは環境学においてもかならずどこかでつながってくると思います。

鞍田●フィールドでは生のそういう現場をみているわけですよ。

阿部●人類学でいったら『マリノフスキー*9』がそう。プロニスワフ・マリノフスキー*9がフィールドワークをしていたときのノートですが、そこには生々しい、それこそ一人の人間としてのマリノフスキーのいやらしい考え方ももしっかりと書かれている。けれども、公に彼が発表したのは、やはりキレイな話ばかりで。

井上●文部科学省あるいは大学という知の組織は、その薄まった美しい部分を評価しようということでも成りたっているわけじゃないですか。すごろくも、その途上にできている。毒になる部分を積極的に評価しようとはしていません。でも、私が魅力を感じる人文学者は、みなこの毒に敏感ですね。

知の再編の夢のあと

鞍田●たとえば関西に日文研や民博ができたということは、すごろくから離れるような人たちがいたからではなかったのですか。

井上●梅棹忠夫先生に聞いたことがあるんだけど、けっきょく、自分たちのやっていることは芸事で、国家が勘違いをしてこんなものをつくってくれたと言っておられた。梅棹さんは君臨した人だけれども、志はアナーキストだったんだと思います。

鞍田●環境学って、アナーキストにはでき

ないですかね。アナーキーな環境学。

阿部●ディシプリンにはなれないという意味では、ずっとアナーキー。あるいは、コミュニティではなくコミュニタス的な存在——これは前所長の立本成文さんがいつも言っていたことだけれども、つねにお祭りの、一過性の存在ではある。

井上●人類は最終的に自爆するのかもしれないのに、自分のつごうで地球をどんどん変えている。これはもう止められない。だけど、何パーセントかの人間は、「これでよいのか」と戸惑いを感じている。そんな人たちの戸惑いがいくらかなりとも解消される言葉を与えてあげるのが使命なんだ、と思えばいいのではないのでしょうか。

鞍田●心の安らぎを与えるような、ですか。

井上●もつと極端にいうと、建物を建てる時、地鎮祭をやりますよね。あれは、地面にたいして申しわけないことをするので、地霊に謝る儀式なんです。そして、謝ったのだから、大きいものを建てさせるということになる。地霊よ、これ以上文句を言うなというわけです。地球環境にたいしても、「心配してあげたんだから、好きなようにやらせてくれ」というカラクリのなかに入っているのかもしれない。

稲賀●さきほど芸事の話がでしたが、もともとは祭礼であって、神さまに捧げるところが世俗化してしまった。生け花もそうですし、能にしたって奉納するものです。となると、民博も日文研も地球研も、つかの間のお祭りを司っている現代の神社なのかなという気はします。

阿部●やっぱり、われわれはお祭りをやっているわけね。

井上●地鎮祭によばれる神主みたいな役回りだね。

2013年4月24日 地球研「はなれ」にて

*9 1884-1942年。人類学者。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、のちにイェール大学で人類学を担当。第1次大戦中にニューギニアで長期にわたるフィールドワークを実施し、人類学研究ではじめて参与観察を導入したことで知られる。著作は『西太平洋の遠洋航海者』ほか。

〈ことば〉から考える地球環境学 フィールドワーク編

出席 ● 藤原潤子 (プロジェクト上級研究員) + 石山 俊 (プロジェクト研究員) +
市川光太郎 (プロジェクト研究員) + 濱崎宏則 (プロジェクト研究員) + 寺田匡宏 (地球研特任准教授) 司会・編集 ● 寺田匡宏

地球研では、フィールドワークや研究でさまざまな「ことば」が使われている。ことばは人間文化の基礎であり、文化の問題として地球環境学を考えると、その根底にある。そこで、地球環境学とことばについて、さまざまな視点から議論してみたい。今回は「フィールドワーク編」。「現地のことば」を習得しているお二人と、「現地のことば」にそれほど精通することなくフィールドワークをしているお二人に話を聞いた。

寺田 ● まず、みなさんは、どこで、どんなフィールドワークをしていますか。

石山 ● 西アフリカの村落を中心に、農業や牧畜で暮らしている人たちの数十年くらいの生活の変化をインタビュー調査しています。ただ、オーソドックスな人類学者のようにローカルな言語を喋れるかというと、それほど喋れません。もともと NGO のスタッフとして入ったのですが、西アフリカの公用語のフランス語を習得することにウェイトを置いた。それに、最初に行ったチャド共和国のバイリには10以上の民族が住んでいた。そこで一つのことばを選ぶのは難しかった。

「現地語」の多様な位相と通訳とのつきあい方

石山 ● その後、調査地はブルキナファソ共和国になり、地球研ではアルジェリア民主人民共和国とスーダン共和国。ブルキナファソでは、グルマンチェという民族を調べていますが、フランス語ができる人をアシスタントにして、グルマンチェ語の語彙を収集したりしています。

いい通訳ができる人を見つけて、その人とじっくり付きあいながら自分のやり方で情報を収集する。基本的には一つの村落で、同じ質問を何世帯にもわたってくり返していきますから、こちらのやり方はすぐに理解してもらえます。逆に、インフォーマントへの通訳より先に自分の意見を言うアシスタントもいますが(笑)。

藤原 ● 私が解ることばはロシア語で、東



アルジェリアのサハラ・オアシスでの調査風景。アラビア語の会話を傍らで聞きながら、「こそぞ!」というときにはフランス語に訳してもらおう(撮影・石山 俊)

シベリアのサハ共和国で調査しています。サハではロシア人、サハ人のほか、さまざまな民族が暮らしています。ロシアではロシア語が公用語ですが、共和国レベルでも公用語が定められていて、サハ共和国ではロシア語とサハ語が公用語。調査のときは、ロシア語を話せる人なら問題ありませんが、サハ人の村で調査するときは、相手によっては通訳が必要になります。でも、通訳はすごく使いにくい面がある。尋ねたことへの回答で情報を得ることはできるのですが、現地の人になげなく話していることに、「えっ、それなに」という情報の取り方ができない。それに、村役場の文書が全部サハ語だったりして文書資料も集めにくいと感じたり……。

ただ、サハ共和国にはたくさんの民族がいるのですが、もっと少数民族になると民族語がほとんど忘れられているので、共通語がロシア語になる。すると、ことばの壁がなくなる。皮肉ですが。

必要に迫られて、ことばを学ぶ

市川 ● 調査地はスーダンです。公用語は

アラビア語ですが、調査地のベジャ人の村ではベジャ語が現地のことば。去年2月に、アラビア語を喋れない状態で調査地に入りました。現地の研究者、大学の先生は英語があまり喋れない。そういう人たちと1か月間キャンプをした。すると、会話に使うことばがだんだんとミックスされてくる。英語で言っても50パーセントしか伝わらないので、ぼくがアラビア語を学んで、最終的に調査上の指示や相談はアラビア語になった。大学の先生だけと喋るときがcaろうじて英語。このことばも満足に意図が通じないと、使うことばがミックスされてきますね。

濱崎 ● 私の専門は政策科学、政治学です。水のガバナンスの研究をしているので、調査は必然的にインタビューが中心で、聞く相手は、上は国際機関のスタッフから下は村人まで。

プロジェクトの調査地はトルコ共和国南部の地中海沿いのアダナです。ひと昔前の日本のような感じで、トルコ語しか喋れない人が多いですね。カウンターパートの大学の先生は英語ができるので、いつもいっしょに行動して、英語に



(右から)

てらた・まひろ
専門は歴史学、記憶表現論、研究高度化支援センター特任准教授。二〇二二年から地球研に在籍。
いしやま・しゅん
専門は文化人類学。研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究」プロジェクト研究員。二〇〇八年から地球研に在籍。
はまざき・ひろのり
専門は政策科学、研究プロジェクト「統合的水管理のための「水士の知」を設える」プロジェクト研究員。二〇二二年から地球研に在籍。
いんたわ・ジュンたろう
専門は言語学。研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究」プロジェクト研究員。二〇〇九年から地球研に在籍。
ふじわら・しゅんご
専門は文化人類学。研究プロジェクト「温暖化するシベリアの自然と人」プロジェクト上級研究員。二〇〇九年から地球研に在籍。

通訳してもらいながら調査しています。

ただ、ぜんぶが通訳だとお客さん扱いになって、本音が聞き出せない感じがある。けれど、自己紹介くらいはトルコ語で言えるようにして、姿勢だけでも「あなたとコミュニケーションしたい」という意志を示すと、親近感をもってもらえて調査がしやすくなる。ことばの力は大きいなと思います。なるべく英語ですませようという気持ちをもたないようにして、調査をしていますね。

寺田●「現地語」といっても一様ではなく、いろんなレベルがあるんですね。

変容することば

石山●フランス語も、アフリカのフランス語はちょっと特有で、その違いはすごくおもしろい。自分の母語の文脈で使ったり。チャドで調査していたカネンブという人たちも、フランス語を喋る。ところが、あいざつにしても、「Bon jour」に続いて「Ca va?」「Ca va bien」と返すところを、「On est là?」「オネ・ラ?」と言う。これは「そこにいるの」というような意味で、カネンブ語のあいざつの「ダミア」を言い換えたもの。それがすごくおもしろい。

市川●スーダンの調査地はドンゴナブ(Dungonab)という村ですが、それは「ジュゴン」の英名、dugongに由来します。「アブ(ab)」がアラビア語で「いる」という意味

らしく、ジュゴンのいる場所という意味で「ドンゴナブ」となったようです。村としては古くからあるのですが、地名は英語の影響を受けている。英語とアラビア語がミックスされて生活のなかにはいりこんでいる感じがしますね。

藤原●私はサハでロシア語を忘れてしまったロシア人の村に行ったことがあります。もともとウラル山脈よりも西に住んでいたロシア人がサハにきたのは17世紀くらいですが、サハ人に囲まれて暮らしているうちにロシア語を忘れてしまった。ロシア語の歌は歌いつがれていたのですが、ロシア語が解らずに歌っていたから間違いだらけになっていた、というのが村の笑い話になっています。

ロシア語が話せなかったのは現在の中高年の親の世代で、現在では多くの村人がロシア語もサハ語もわかります。ただ、彼らの言葉は二つの言葉が頻繁にミックスするのが特徴で、「私たちは一つの文章を一つのことばで覚えることができないのよ」なんて言っています。

濱崎●トルコでは、町なかでは英語は聞かないですね。トルコ語一色です。いっぽう、カンボジアは英語が話せないと先のキャリアにきちんとつながらない。ということで、言語習得熱はすごく高い。ただ、公用語としては位置づけられていなくて公用語はクメール語。それでも、統計資料などは英語版がかならずあります。政情が安定した1990年代以降、日本のJICAがテコ入れをして、統計をとることの重要性を教えたとき、クメール語と英語のペーパーの両方をつくらせるようにしたからだそうです。

生活語と公用語における「環境」のギャップ

寺田●いろいろな変容や混交があるようですが、現地の生活語のなかの「環境」と公用語やリング・フランカでの「環境」とのギャップについてはどうでしょうか。

トルコのアダナのアカルス地区で水利組合の理事(中央)にインタビューする。話しはじめると、どこからともなく農家の人たちが集まってくる。写真右端は現地のカウンターパートの大学の先生。通訳もしていただく(撮影・濱崎宏則)

石山●90年代にチャドで環境NGOのスタッフとして村人の現地語会話を聞いていたとき、たとえばガンバイ語で話しているも、「環境」だけフランス語の「アンピロマン」になったり、「植林」だけ「Reboisement」の「ルボワーズマン」になったりした。日本語でも「砂漠化」や「地球環境問題」も新しくつくられたことばでしょう。それが現地語になっているところがあったらすごくおもしろいのですが。

市川●ベジャ語とかで(笑)。じつは、ベジャでの環境保護に対する意識はすごく強い。国立公園も大きな規模で指定されていて、それを村人が知っている。ナマコの資源の乱獲を抑えるために、漁期も設定している。ジュゴンを守りつつ、できれば観光資源にしたいという話もよく出る。でも、ことばとしてあるかは残念ながら知らないです。

濱崎●私たちの研究プロジェクトは、水管理の伝統的な知を集めて望ましい地域的な水管理を考えようとしています。たとえばインドネシアには、1,000年以上前から「Subak」という名の水利組織がある。トルコでは水利組織は「Sulama Birigi」という言い方をします。ただし、それは水利組織ではなくて、直訳すると「灌漑管理」。現地の人がある言葉を使うときに込められている意味は、おそらくその地域内に限定されてある。

英語ならすべて「ウォーター・マネジメント」になりますが、その地域の歴史、伝統的な文化や慣習まで踏まえて理解しようとするれば、言語は大きな一つのファクターになると思います。

マイナーな言語どうしがどうつながるか

石山●共通項はいろいろあるでしょうが、ぼくは違いのほうがおもしろいと思ってしまう。自然資源を利用して生きている人たちは、周りの自然に対する感覚がことばのなかに埋め込まれている。ただ、

(次ページに続く)



〈ことば〉から考える地球環境学

フィールドワーク編

サハ語とロシア語が飛び交う村の森で野生のベリーを摘む(撮影・藤原潤子)



それが地球規模になったときに、自分とはかけ離れてポーンと膨らんでしまう。そういうところでぼくらが「地球環境問題」って連呼したら、「こいつらなにを言ってるの」ということになる。

ぼくはフィールドでは、「地球環境問題」という言葉は使いません。「オアシスの水が少なくなる問題」というように読み替えて、ことばもそういう使い方をする。ただ、これは地球環境問題を考えるときに、ぼくらがどう消化するかですが、同時にことばの問題はもうすこし大きな枠組み、問題に含まれているとも思う。

寺田●言語は枠組みを決めることでもあって、さまざまな関係を生じさせる。日本語で地球環境学を考えることと、それ以外の言語で環境学、環境を考えることの違いにも絡んでくる。グローバルな研究の場では、英語が使えないと発信できないこともある。

いま、『地球環境学事典』を英語版にする計画が進んでいます。たしかに日本語はマイナー言語だから、世界に知られるには英語にしなくてはならない。でも、マイナー言語どうしがつながりあう方法もあるとも思うのですが。

藤原●つながるためには英語が仲介にな

るのではないですか。マイナーどうしはすごく難しいですよ。市川●科学は、いちばん多くの人に読んでもらえるところを探すと英語になる。ただ、その現象をもっと人の生活に役だてたい、行政に反映させたいと思うと、やはりその国の言語がいちばんいい。

小さなことばからの視点を大切にしたい

寺田●いちどインドネシアで、日本語とインドネシア語のバイリンガルのワークショップに参加したことがあります。ふつう国際会議だと英語を使う。でも、そのワークショップは地域研究者が企画して、日本人は日本語で、インドネシア人はインドネシア語で話し、地域研究者が逐語訳してくれた。時間は2倍かかりましたが、お互いに満足感がありましたね。

石山●それはおもしろいね。ただ、それは、日本語とインドネシア語というナショナルレベルで普及していることばどうしだからうまくいった気もしますよね。日本語とアラビア語でも成りたつだろうけど、日本語とサハ語とか、日本語とグルマンチェ語だとどうなのかな……。

藤原●ことばがうまい人のほうがディスカッションで上位に立つてしまうので、対等になるために通訳を入れるという方法はありますよね。最近、日本人のビジネスマンがロシアで商売をするとき、ロシア語はわざと喋らず、英語で商談するという話を聞きました。ロシア語だとロシア人のほうが話を有利に進められるし、ケンカにも勝てない。

石山●ディスカッションで、ことばの能力によって階層化してしまうのはちょっとね。ぼくらも外国語で議論しても勝てないしね。英語圏以外には、英語が得意じゃない人はいっぱいいる。国際会議でアルジェリアの人などが出てくると、「いやあ、ぼくは英語が下手だから」とか言いながらがんばって喋っています。地球研もひとがんばりして、そういう試み—発信を日本語と英語プラス何語かでトライするか……。うちのプロジェクトでは、成果出版(Arab Subsistence Monograph Series)を英語、日本語のほかに、アラビア語、スワヒリ語でもしている。『地球環境学事典』をインドネシア語でつくるとかね。藤原●それはいいですね。各地のことばで……。

石山●言語って、英語みたいに全世界的なものがあるって、サハ語のように少数の人たちだけが使っている小さな言語もある。ナショナル・ランゲージやローカル・ランゲージ、リージョナル・ランゲージがどうつながりあえるのか。

寺田●環境学ではやはり、ドミナントな言語としての英語のアーリーナがあって、そこに乗れるか乗れないかというところがある。でも、そんな競争のようなものではない回路もどこかにないと……。

石山●「弱者の視点」という言い過ぎかもしれないけれど、勝ち負けではない視点、いろいろなところから漏れ落ちてしまう人のための視点は大事にしたいね。

寺田●文化の問題として環境を捉えるという視点は、そのあたりにも関係するかもしれないね。

2013年5月13日 地球研ダイニング・テラスにて



初めてジュゴンを捕獲し、発信機装着に成功した直後の調査隊。興奮がおさまらず、英語、アラビア語、ペジャ語、イタリア語が飛び交った(撮影・市川光太郎)

百聞一見——フィールドからの体験レポート

世界各国のさまざまな地域で調査活動に励む地球研メンバーたち。現地の風や土の匂いをかぎ、人びとの声に耳をかたむける彼らから届くレポートには、フィールドワークならではの新鮮な驚きと発見が満ちています



ボートでサンプリングに行く筆者

零細漁業の実情から 資源管理のあり方 を考える

岡本侑樹 プロジェクト研究員

おかもと・ゆうき

専門は環境マネジメント、漁業資源管理。研究プロジェクト「東南アジア沿岸域におけるエリアケイバビリティの向上」プロジェクト研究員。2012年から地球研に在籍。

ベトナム社会主義共和国のフエ省を訪れたのは、院生のころ。ちょうど「マングローブ伐採＝エビ養殖」のイメージが定着していた時期である。当時は、ともかく現場を見てみたいという一心で、先生に誘われるがまま飛行機に飛び乗った。以来8年間、ときに素朴で、狡賢く、人間味あふれる人びとに魅了されながら、エビ養殖も含めた零細漁業の実態について漁師の方から勉強させていただいた。

「おせっかい」好きな人びと

ベトナムでは、日本の田舎と同様、家族や人とのつながりが強く、大切にされている。見知らぬ土地でエンジントラブルに見舞われても、道行く人に助けを求めれば、「あーでもない、こーでもない」と親身になり手を差し伸べてくれる。エ



ンジンをちょっといじって、違う部分までおかしくなり、「こりゃ駄目だ」と、結局のところどこからか修理工がやってきて直してくれる。修理が終わると、「あーだ、こーだ」言いながら、お礼の一杯で盛り上がり、トラブルもなんのその、みんな笑顔で帰宅する。スペシャリストではなくても経験をもち寄り助けあう、まさにみんなで困難を乗り越えてきたベトナムのスタイルである。

漁業においても同様で、それぞれの経験則から、漁期や漁法について「あれはこうだから、ああしたほうがいい」と漁仲間に口をはさむ。各人の漁業へのスタンスが見え隠れする瞬間である。第三者である私は聞いていて楽しいが、勧められている漁仲間は自分のポリシーがあるようで、「うん、そうしよう」と納得はできず……。それでも、よかれと思って言っていることで、どこか憎めない。

零細漁業における副業との組みあわせ

私がお世話になっている村では、小規模な定置網と刺し網を用いた天然の漁と、蓄養、養殖がほぼ同所的に行なわれており、なかでも蓄養が盛んである。蓄養は網と竹で囲いこんだだけの所に近辺で獲れた稚魚(アイゴ、ボラなど)を海藻といっしょに放っておくだけのシンプルなものである。ただ、ここで行なわれている蓄養は、囲いが部分的に開いているのである。「せっかく獲った稚魚も逃げるのでは？」と思うのだが、「逃げる魚もいるが、入ってくる魚もいるからそれでいい」とのこと。まさに経験則にもとづく漁場の管理である。

また、この村では、漁業の他にいくつもの副業を抱えている。バイクタクシー、魚介類の仲買人、結婚式のMC、田んぼの手伝い、塾の講師、学校の先生、内職(笠作り)、カフェ、自家製発酵食品の作成販売、バイクの修理、土木作業、個人商店、サンドイッチや肉まんの販売など、ありとあらゆる副

業で不漁や長い雨季、洪水等の災害・生業リスクに対処している。生計において一番重要なのは漁業であるが、おいしい話があればそれに乗っかるという、一過性の商売も生業に組みこまれている。

現地にあった漁業資源を維持する しくみの実践をめざして

こういった副業をあわせもつなかで、現地の人びとにとっての漁業の位置づけは、獲れるときに獲って、獲れないときは他でやり過ごすというものである。これは、過去のエビ養殖ブーム時の病気の蔓延の経験や、気候による天然稚魚の不漁・豊漁年の経験も相まってであるが、いっぽうで、稚魚の獲りすぎは当然ながら親魚を減らす一因であり、こちらへの思慮が欠けている感も否めない。

ある日、村の人たちに私の漁場環境調査の結果である、エビ養殖漁場の底質と貧酸素水塊の発生について報告した。すると、餌のやり方を変えたり、養殖密度を減らす、休閑も踏まえた養殖場のローテーションを考えるなど、ちょっとずつ対応したり工夫する漁家もあらわれ、自発的な活動が見えるようになってきた。つまり、自分の中で納得できれば、それぞれの考え方も変わるのである。理論上いかによいものであっても、当人が納得しない限り自発的な変化は起こりえないということを実感している。

この養殖の例のように、漁業者が納得し自発的にできる天然稚魚の管理を実践できないかと、日々妄想している。今後、経験則で行なわれている蓄養のシステム(獲り残し・獲り逃し)の理解を深め、外で獲られている天然稚魚への漁獲圧、そしてその稚魚の生態を明らかにし、これらをお世話になった漁師の方がたに還元することで、現地における天然稚魚を管理するしくみの構築に向けた、いい意味での「おせっかい」が少しでもできればと考えている。

漁場内の掘立小屋。一家での団欒もここで。汽水なので蚊もなく、熱帯夜でも淵上は風が抜けて涼しい

地域と社会科学にもとづく環境学の構築

うやる あいすん(UYAR, Aysun)

専門は国際関係論、国際政治経済。2013年4月から同志社大学グローバル地域文化学部助教。2010年4月から2013年3月まで地球研研究推進戦略センター研究開発部門助教。

報告 ● ウヤル・アイスン

EPM (Environmental Policy Making) 勉強会は、2010年度に地球研内に立ち上げた環境政策に関するセミナー・シリーズです。研究成果を国内外の関係機関が政策立案・策定に利用できるように、環境政策のあり方や問題点などを議論してきました。地球研の研究プロジェクトに、より強く社会科学の視点を取り入れるようにしたかったのです。内外の研究者を迎えて2010年5月から2013年3月までに約20回開催。なお、2013年度からは「EPM-REG勉強会」と名称を変更しています。

勉強会では、まずローカル、リージョナルおよび国際レベルでの各環境問題に関する政策決定メカニズムやガバナンス問題、さらにそれらを包括する学術的フレームワークについて議論しました。かなり広いスコープで始めました。具体的には、中国やトルコ、米国におけるローカル環境マネジメントモデルの事例に注目し、さらには地球研の終了プロジェクトをもとに企画される研究コンソーシアムのあり方などについても議論を重ねました。

新たな問題点と見方に対応して

勉強会のこの3年間は、地球環境問題の解決に向けての国際的な枠組みについても新たな展開があった時期でもありました。2011年にはICSUの「Future Earth—グローバルな持続可能性のための研究」で、トランスディシプリナリティの必要性とあり方について議論されました。2012年にロンドンで開催された「Planet Under Pressure シンポジウム」では、この考えをさらに発展させ、同年リオで開催された「国連環境開発会議」(Rio+20)につなげました。ここでは研究者側から、経済や社会開発と環境ガバナンスに

る制度的な枠組みについて提示を行なったのです。

この国際的な動きと連動して勉強会でも積極的にグローバルレベルでの決定メカニズムと組織体制の事例を取りあげました。地球研の各研究プロジェクトは、どちらかといえばローカルあるいはリージョナルレベルでの問題を扱っていましたが、勉強会で、そこに国際的な視点を導入できればと考えたのです。

EPM-REG勉強会として

地球研には、今後とも社会科学にもとづいて議論する研究グループは不可欠です。社会科学にこれまで関心のなかった地球研の研究者にもぜひ参加してもらいたい。そのためcurious hypothesis (奇妙な仮説)——社会科学だけではなく、自然科学の専門家や研究員たちも興味を引くような魅力的な仮説を設定し、その仮説のもとに勉強会を開催するようにしました。また、課題も以下のように絞ることにしました。さらに名称にREG-Regional

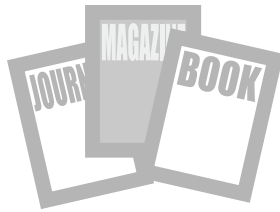
Environmental Governance (地域環境ガバナンス)を加え、以下のような課題を設定しました。地球研の研究プロジェクトを想定しながら勉強会をすすめたいと考えたからです。

- ◇自然科学と社会科学が対等に統合できる研究プロジェクトや研究モデルをどのように立てるのか。
- ◇自然科学と社会科学との本格的なコミュニケーションはどんなかたちで可能か。
- ◇研究プロジェクトを立てるときに、その研究プロジェクトに真に必要な研究者をどう選ぶのか。

新しいEPM-REG勉強会は地球研の内部にとどめるものではなく、他の研究所や大学と連携したいと思います。「地域」と「ローカル」を繋ぎながら、グローバルな変化や学術の新しい見方 (Future Earth プロセスなど)も含めて、総合的な方向に向かってEPM-REG勉強会を進めたいと考えています。

EPM勉強会の開催実績

回	開催日	発表者	テーマ
20	2月26日	アイスン ウヤル (地球研 助教)	Future Direction of Environmental Policy Studies at RIHN
19	1月22日	Jörg Balsiger (Senior researcher, University of Geneva)	Constructing Regional Governance
18	11月30日	臼井陽一郎 (新潟国際情報大学 教授)	EUの環境ガバナンスと政治の視点
17	7月27日	丸山康司 (名古屋大学大学院環境学研究所 社会環境学専攻 准教授)	エネルギー倫理委員会の議論にみるドイツの環境政策
16	7月6日	アイスン ウヤル (地球研 助教)	International Environmental Politics of Rio+20: Where are we Heading from Now on ?
15	2月22日	Müge Kinacioğlu (Hacettepe University, Ankara, Turkey)	Environmental Security in International Politics
14	1月23日	Zamba Batjargal (RIHN Visiting Fellow)	Negative and non-negative impact of the Dust and Sand Storms (DSS), originated in Mongolia for countries in Northeast Asia
13	12月22日	梅津千恵子 (地球研 准教授)	トルコセイハン河流域における不確実性下の水管理
12	11月29日	花松泰倫 (北海道大学スラブ研究センター 学術研究員)	地域環境協力におけるデータ・情報の共有
11	7月11日	Steve McCauley (Clark University, RIHN Visiting Fellow)	Innovative Forums for Environmental Governance: Experiences with Energy Sustainability in the Urban Context
10	6月20日	松井範博 (帝京大学経済学部 教授)	Disaster, Relief and Environment: Learning from Famine for Public Policy
9	6月7日	諸富 徹 (京都大学大学院経済学研究科 教授)	低炭素経済へ向けた環境政策のポリシー・ミックス
8	3月7日	白岩孝行 (北海道大学 低温科学研究所 准教授)	アムール・オホーツクコンソーシアム設立以降の戦略
7	1月26日	谷口真人 (地球研 教授)、Karen Ann B. Jago-on (地球研 研究員)、アイスン ウヤル (地球研 助教)	Establishment of a Research Consortium: Special Focus on Urban Water Consortium
6	11月29日	Karen Ann B. Jago-on (地球研 研究員)	Formation of a Consortium on Urban Water in Asia
5	10月28日	窪田順平 (地球研 准教授)	中国の環境政策実施過程における地方政府の役割 —中国西北部・黒河流域の「節水政策」を事例として
4	9月30日	アイスン ウヤル (地球研 助教)	地球研における環境政策の決定メカニズム、研究のアジェンダ設定
3	7月29日	Bao Maohong (Peking University/RIHN Visiting Fellow)	Academic Institutions and Environmental Policy Making in China
2	6月29日	米本昌平 (東京大学先端科学技術研究センター 産学官連携研究員、特任教授)	地球環境問題にアカデミズムはどう貢献するのか —志としてのアジェンダ設定
1	5月13日	花松泰倫 (地球研 研究員)	アムールプロジェクトの政策立案への取り組みについて



地球研の各プロジェクトや個々の研究者たちは、さまざまな媒体で研究成果を続々と出版しています。このページは、地球研コミュニティのみなさんに読んでいただきたい著作にスポットをあてて、編集委員が発行の目的や著者のねらいなどを、客観的な講評をくわえて考察するコーナーです。地球研の存在価値、プロジェクトの特徴、研究者のまなざしを再確認する標としてご活用ください。

人間科学としての地球環境学 ——人とつながる自然・自然とつながる人

立本成文 編

京都通信社 2013年3月
298ページ 定価2,600円+税

立本成文前地球研所長の退任に際して、立本成文編著『人間科学としての地球環境学』が刊行された。目次は右記のとおりである。

ベルク氏は所外からの寄稿者だが、それ以外は地球研所内の、旧研究推進戦略センター(CCPC)のスタッフを中心とした寄稿者によって編まれた著作である。

＊

本書は、理論的考察の書だが、おおまかにいって三つのパートに分かれている。

初めのパートは、環境学研究に関わる基礎的概念(主体、関係価値、風土:milieu)に関する理論的考察である。鞍田はこの半世紀に及ぶエコロジー運動を三世代に分け、それらをカウンター、トレンド、ノーマルと移行したと位置づけたうえで、現代のエコロジー第三世代の主体性を、限りある暮らしをいとおしむものであるとし、同時に、そのいとおしむ主体そのものの在り方を問うことが今日必要であるとする。

阿部は、環境問題は、方法というものを研ぎ澄ましてきた近代科学が解き得ないアポリアであるとしたうえで、使用価値や交換価値ではない関係価値という概念を提唱し、そのアポリアへの新しいアプローチを探る。

ベルクは、日本の哲学者・山内得立の『口ゴスとレンマ』という著作によりながら、人間や生物にとって図でも地でもないmilieuの哲学的基礎を築こうとする。

＊

二つめのパートは、東アジア、東南アジアの場から地球環境と地域との関係を理論的に考察したパートであり、立本による四つの考察からなる。

「地域と地球」では、ディシプリンとしての地域研究と地球環境学研究の関係ないし、前者による後者への寄与が叙述される。

てらだ・まさひろ

専門は歴史学、記憶表現論。研究高度化支援センター特任准教授。2012年から地球研に在籍。



目次

序	立本成文
第1章 環境問題と主体性	鞍田 崇
第2章 価値を問う——「関係価値」試論	阿部健一
第3章 風土とレンマの論理 オギュスタン・ベルク (鞍田崇訳)	
第4章 地域と地球	立本成文
第5章 地球環境問題と地域圏	立本成文
第6章 東アジア圏論の構図	立本成文
第7章 海洋アジア文明交流圏	立本成文
第8章 統合知(方法論)	半藤逸樹+大西健夫
第9章 地球システムと未来可能性	半藤逸樹
跋	立本成文

「地球環境問題と地域圏」では、環境と環境問題の基礎的構図が確認されたうえで、

地域圏という概念が導入され、その地域圏を自然生態、社会制度、文化シンボリズムの三つのカテゴリーから分析する社会文化生態力学の構図が提示される。「東アジア圏論の構図」では、これまでさまざまにおこなわれた東アジアにおける圏域の設定に代わってグリーンベルトとブルーベルトを基盤とした圏域の設定がなされたうえで、その未来のシナリオが記述される。「海洋アジア文明交流圏」では立本の海洋アジアでのフィールドワークの足跡と交差した形で文明交流圏の未来が語られる。

＊

三つめのパートは、地球環境に関する学問の統合をどのようにおこなうかをメタレベルで考察した二つの論考からなる。

「統合知(方法論)」では、認識科学から設計科学への統合の歴史や学説史が紹介され、地球研のこれまで実施された研究プロジェクトを多面体の座標軸に位置付ける試みがおこなわれる。「地球システムと未来可能性」では、ストックホルム環境研究所が提唱したヒューマニティー・パウンダリーズ概念に日高敏隆と半藤の「未来可能性」の議論を対置し、その有効性を提起する。

＊

紙幅の関係で簡単な紹介しかできなかったが、どれもが力のこもった論考である。それぞれの論者は、社会人類学、地域研究、

哲学、応用数学などを専門とするが、地球環境学研究の構築のために、自分の固有の領域から一歩も二歩も踏み出している。いや、それどころか、それぞれの著者が自分の専門領域のジャーナルにだけ執筆していたとしたら執筆することはおそらくなかったであろう内容を記述している。

＊

地球環境学研究のためには、道具をまずはつくらなくてはならない。その基礎が本書によって固められているといえる。と同時に、本書は、さまざまなアイディアにあふれた試論の書でもある。研究者は本書からさまざまに触発され、自分ならどう考えるかを考えることができる。地球環境学に関わる研究者が本書を媒介に自分の考えを展開していくことが望まれる。それだけでなく、本書は日本語で書かれているが、多言語に翻訳されたり、より広い国際的な議論の場での議論がおこなわれたら、きっとさらなる理論的飛躍が起こることが予想される。多くの読者に迎えられることを願う次第である。

本書のもとになったのは2010年度から地球研でおこなわれてきた「総合地球環境学ゼミナール」であるという。その成果はこれまでワーキングペーパーの形でしか読むことができなかったが、今回1冊の本にまとまったおかげで、より体系化した形で読むことができるようになった。地球環境学は構築のただなかにある学である。学の構築のためには、議論をつねに積み重ねてゆることが必要である。本書によってきっかけのつくられた議論を、いかに展開してゆくのかは、読み手に課せられた課題である。(研究高度化支援センター 寺田匡宏)

探求に普及をプラスして

辻野 亮(奈良教育大学自然環境教育センター 准教授)

屋久島の原生林で樹木の生育地形やシカ・サル・キノコとのかかわりを明らかにする生態学の調査に一区切りつけたころ、地球研の「列島プロ」*1に所属することになりました。はじめは信越国境秋山地域で、人が森林を利用することで植物種多様性や哺乳類相がどう変化するかを調べていましたが、しだいに生物資源の持続性や人と自然とのかかわりの歴史などを調べるようになってゆきました。列島プロを出てからは環境研究総合推進費プロジェクトS9*2に所属して、地球研での経験を大いに活かし、東南アジア諸国でどのような歴史・社会状況によって森林が減少してきたのかを調査していました。

森林減少の緩和策

森林減少は、木材資源が失われるという経済的損失だけでなく、生物多様性の喪失や炭素蓄積の低下、生態系機能の損失を生み出しています。この森林減少の問題を解決するためにどうしたらよいのかを考えてゆくと、単純で唯一の答えにはどうにも到達しそうになく、歯がゆい状況にいつも悩んでしまいます。

たとえばインドネシアやマレーシアでは、熱帯林減少要因の一つとしてアブラヤシのプランテーションが挙げられるでしょう。だからといってアブラヤシのプランテーションを一律に禁止してしまえば、現地の経営者や労働者らの生活が崩壊するかもしれないし、ヤシ油の利用者には油が届かなくなってしまうかもしれません。木材伐採を全面禁止すればよいような気もしますが、うまくゆくとは限りません。ある国の伐採禁止で木材の供給不足が発生すると、近隣諸国では違法伐採が増えてしまうかもしれません。

よりよい自然と社会を築き上げてゆくためには、複雑に絡み合った問題群である「地球環境問題」を解きほぐしてゆかねばならないようです。そこで得られた知

見や「解決策」を社会に導入してゆくことが必要ではあるものの、現状を見る限り、東南アジアの熱帯林消失に歯止めをかけて回復させてゆくための魔法の処方箋は、まだ見つかってはいないようです。



飛火野で執筆中。シカが草地を維持している(2013年5月、撮影・山本美智子)



大学近くの実習園で育ち始めた作物。奥は黒ビニール、手前は稲わらを畑に敷いて雑草を防除している。手間と効率、収量、持続可能性などを考えるとどちらがよいのだろうか。後ろには若草山と御蓋山(みかさやま)、春日山原始林が見える(2013年6月)

自然環境を実感する試み

ところで、私たちは動物であり生態系の一員です。毎日食べるものは生き物ですし、私たちにさまざまな恵みをもたらしてくれる自然環境から逃れて生きることは到底できません。しかし、現代社会においては生物多様性や生態系から受けている恩恵や自然の機微が忘れられがちです。本業の生態学からはしばらく離れていたのですが、奈良教育大学自然環境教育センターに異動したのを契機に、生物系の教員として生態学の実習や脊椎動物の形態・生態・進化に関する講義などをすることになりました。そのいっぽうで人と自然の歯がゆい関係のことも伝えてゆくことになりました。

学部講義「自然環境学」は、人と自然とのかかわりを議論するのにうってつけの場として活かすことができます。半数以上の学生は教員をめざしていますから、彼らに自然の機微や人と自然のよりよい未来について考えてもらう機会を作ることができれば、次の世代を担ってゆく人びともきっとその心は伝わるはずで、そこから世の中のなにかが変わってゆくはずで、そのほかにも大学のそばにある附属の実習園(畑)では、土に触れて作物を育てることを通じて学生や市民に自然とのかかわりを体験してもらっていますし、奥吉野にある附属の演習林でも森林を題材にした自然とのかかわりを体験できます。

まだ手探りの状態ですが、自然環境のことを頭で理解、心で納得、体で実感できるしくみを作れないものかと画策しています。これからの時代をよりよく生きてゆくためのヒントを探りつつ、自然環境や人と自然とのよりよいかかわりを伝えてゆこうと思います。

つじの・りょう

専門は生態学。研究テーマは人と自然とのかかわりや植物と哺乳類の関係。2006年から2011年まで日本学術振興会特別研究員(PD)やプロジェクト研究員、上級研究員として地球研に在籍。2013年から現職。

*1 「日本列島における人間-自然相互間の歴史的・文化的検討」プロジェクト、リーダー・湯本貴和(FY2006-2010)

*2 環境省 環境研究総合推進費 S9「アジア規模での生物多様性観測・評価・予測に関する総合研究」 <http://s9.conservationecology.asia/>

所員紹介 — 私の考える地球環境問題と未来

メガ都市空間のあり方を探る

内山 愉太

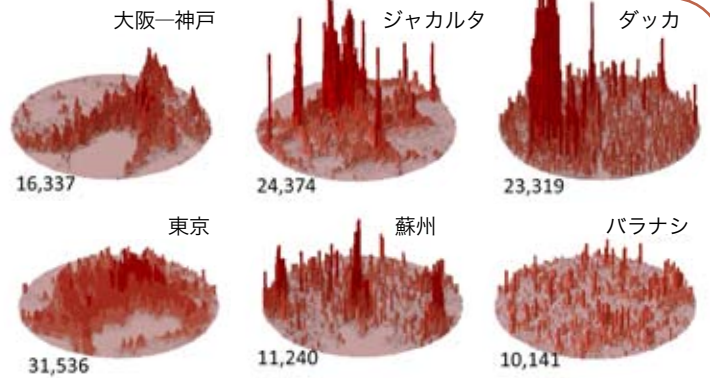
(プロジェクト研究員)

メガ都市の地理空間情報をもとに、①メガ都市空間の現状および趨勢を把握し、②将来にわたる変化を予測することに加え、③地球環境におけるメガ都市の持続可能性を評価することを行なっています。メガ都市の抱える問題の多くは、グローバルに共有されています。具体的には、都心部の過密居住の問題や、都市圏拡大による交通問題、格差・分極化などがあり、全球的な視野を有する地域を超えた取り組みの必要性が高まっています。そのため不可欠となるのが、客観的に比較可能な基盤となる地理空間情報です。

メガ都市空間の比較研究

同規模のメガ都市が抱える問題の様相は、人口分布特性等の空間的な特性と関係していると考えられます。私たちはそのような考えのもと、世界のメガ都市の人口分布特性による類型化を試みました。活用したデータは、基盤的な地理空間情報の一つである、全球について整備された推計人口分布データです。類型化を行なった結果、ジャカルタ、バラナシなどの新興のメガ都市は、東京、大阪—神戸などの成熟したメガ都市とは大きく異なる人口分布特性をもっていることが

図1 とくにアジアに多い新興のメガ都市は、成熟したメガ都市と大きく異なる人口分布特性をもつ。半径50km圏内の人口密度分布を立体的に表示。数字は人口(千人)



把握されました(図1)。人口増加が停滞傾向にある成熟したメガ都市は、中程度の密度帯に人口が集中し、明確な単一の中心をもち、中心から周縁に向かって徐々に低密化する人口分布特性を有しています。

他方、今後も著しい人口増加が予想される新興のメガ都市は、低密または高密の両極端の密度帯に人口が集中し、都市圏内に明確な単一の中心をもたないか、中心を有していても、周縁部に高密な人口集積地を複数抱えるという特性をもっています。新興のメガ都市は、深刻な格差・分極化を表象する人口分布特性をもちつつも、大規模集積のメリットを享受しながらその弊害を回避しうる多心型都市地域構造へと転換しやすい空間特性をもっているといえます。

最近では、メガ都市の歴史的な居住環境形成における生態環境の影響力の強さを把握すべく、人口密度と緑地関係指標の分布の相関を分析しています(図2)。各都市においてもっとも多くの人びとが生活しているという意味で典型的な居住環境を特定し、その比較分析を進めています。

地域間比較の可能性

私がメガ都市空間の比較研究において扱っている地理空間情報は、グローバルに整備されたデータが多く、そのまま国際的な地域間比較のために活用可能です。そして、その逆もまた然りであると

考えられます。

世界の各地域についてマクロからミクロに至る客観的に比較可能な地理空間情報は、地球環境問題の解決に向け、地域の固有性と共有性を把握し、地域の将来を洞察しつつ、その環境負荷と豊かな社会生活のあり方を模索するさいに有用であると考えられます。したがって、整備途上にある国際的な地域間比較のための地理空間情報の具体的な取得方法、整備状況を把握し、その活用可能性を学際的に共有する必要があると思われます。

地球研においても、各研究プロジェクトにおける地理空間情報に関する知見を整理し、共有化する必要があると思っています。そのようなデータの整理および共有化は、各プロジェクトと地球研にとって、研究の普遍性の把握、データストックの構築につながり、重要性は高いと考えられます。また、データの共有化を通して、異なる研究分野の研究者どうしが、異なる観点から互いの研究について議論を行なうことにより、各研究者にとってのデータ分析の新たな枠組みを構築することや、学際的な共同研究の萌芽を見いだすことにつながる可能性があると考えています。

スプロール化の進行する、ジャカルタ大都市圏郊外部の調査地にて



■プロジェクトリーダーからひとこと

村松 伸 (地球研教授)

内山さんは、メガ都市プロジェクトはもとより、地球研でもっとも地球研に滞在している時間の長い人間のひとりだ。無口はずっとパソコンの前に座っていて、一見するとあちらの世界に行っちゃまっているようにみえる。だが、じつは、壁のぼりなど興味は広い。京都に来てからはお茶にも関心を広げている。プロジェクトリーダーがちやら男だから、あえてじっとバランスを取ってしてくれるのだろう。ありがたいことだ。

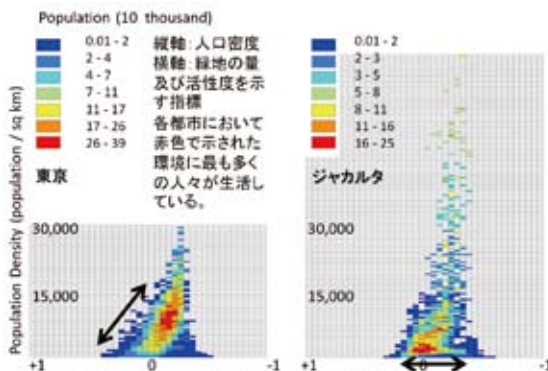


図2 人口密度と緑地関係指標 (NDVI) によって定義される居住環境は、各都市の生態環境と密接に関連している

うちやま・ゆた

■略歴 2013年3月

千葉大学大学院工学研究科博士後期課程修了 博士(工学)

2013年4月から現職

■専門分野 都市・地域研究、地理情報科学

■地球研での所属プロジェクト 「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト—そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」

■研究テーマ メガ都市の居住環境の生態環境との関係性、都市の定義、City Sustainability Index (CSI)、メガ都市の将来人口分布推計

■趣味 クライミング、バスケット、お茶全般(興味)

イベントの報告

第51回地球研市民セミナー
での質疑応答のようす



第50回 地球研市民セミナー

報告
持続可能な地域づくりを支える科学
—地域環境知プロジェクトがめざすもの
2013年5月24日(金)15:00~16:30
(地球研講演室)



今回は研究プロジェクト「地球環境知形成による新たなコモングの創生と持続可能な管理」(地域環境知プロジェクト)のリーダー佐藤哲さん(地球研教授)が講演しました。

佐藤さんはまず、自身の経歴を紹介。研究の出発点では、アフリカのマラウィ湖で淡水魚類の研究を行っていたそうですが、現地の貧困などを見て、地域環境学が必要だと考えるようになったことを述べました。

そのうえで、地域環境学のキー概念である「環境アイコン」、「レジデント型研究者」、「双方向トランスレーター」、「順応型ガバナンス」などについて解説。地域環境学とは問題解決のためにダイナミックに展開する新しいタイプの知であることを語りました。

後半は、「地域環境知プロジェクト」で収集している、日本と世界各地の事例を紹介。兵庫県豊岡市での住民と行政が一体となったコウノトリの野生復帰活動、WWF白保サンゴ保護センターのサンゴ保護活動から広がった地域活性化の動きなど、「レジデント型研究者」が、地域の住民とともにさまざまなアイデアを出しあい、環境の保全だけでなく、地域がいきいきと再生しているようすを示しました。

講演後の質疑応答では、地域が持続可能であるために、研究プロジェクトが終了したあとの展開をどう考えるのかなどの質問のほか、実際にNPOで活動されている方から「専門がないことの悩み」をどう考えたらいいかなどの質問も出て、活発な議論が行なわれました。質疑応答には「レジデント型研究者」として豊岡のコウノトリ野生復帰活動で活躍した経歴をもつ菊地直樹さん(地球研准教授)も飛び入り参加。「熱い」佐藤さんの語りによって、白熱したセミナーとなりました。(寺田匡宏)

第12回地球研フォーラムのようす。会場のスクリーンには常時ツイッターでの発言が映し出された



第12回 地球研フォーラム

報告
“共に創る”地球環境研究
2013年6月29日(土)13:30~17:00
(国立京都国際会館 Room D)

今年度のテーマは「共に創る」地球環境研究」。昨年「つながり」を創る」を受け継ぎながら、さらにそれを研究につなげていくにはどうすればよいかを探ろうとしたものです。

今回の特徴として、①所内の(中堅)研究者の発表を主体としたこと、②ツイッターを積極的に活用したこと、③高校生の参加を積極的に呼びかけたこと、④ユーストリームを利用して、インターネットで同時放映を行なったことなどが挙げられます。会場には、大きなスクリーンを2枚用意し、ツイッターのつぶやきや議題を映し出しました。

フォーラムの前半では、まず、半藤逸樹さん(地球研特任准教授)が趣旨説明で「地球環境研究を“共に創る”という人新世の人間文化」を強調。その後、檜山哲哉さん(地球研准教授)の「シベリアの自然と社会—文・理で共に創る面白さ・難しさ」、菊地直樹さん(地球研准教授)の「コウノトリと暮らす環境を共に創る」の二つの話題提供があり、白石草さん(OurPlanetTV代表、一橋大学客員准教授)がコメントを述べました。

後半は、熊澤輝一さん(地球研助教)が座長を務め、話題提供者とコメンテーターの3人によるパネルディスカッション。シベリアの温暖化のメカニズムはどのようなものか、生物多様性はなぜ大切なのか、コウノトリだけを保存することに意味があるのか、原発の再稼働は必要なのかなど、発表内容に関する個別のコメントや質問、「望ましい未来とは私たちにとってどんなものなのか」という地球環境問題の解決に必要な環境観にかかわる問いかけなど、多彩な内容が寄せられました。壇上のパネリストから投げかけられた質問に、参加した洛北高等学校スーパー・サイエンス・ハイスクールの受講生たちが答えるという場面もみられました。

フォーラムの中心テーマとなったのは、地球環境研究を「共に創る」にはどうしたらいいのかということ。さまざまなステークホルダーを巻き込んで、地球環境研究の新しいテーマを立てることの必要性が認識され、今後はワークショップなどの形で研究のシーズを探ることが提案されました。

参加人数は約120人、ツイッターの利用者は約40人、ユーストリームの放送の視聴者は200人を超えました。(寺田匡宏)

第51回 地球研市民セミナー

報告
農山村の人とくらし
— 獣害のようすとその対策
2013年6月21日(金)15:00~16:30
(地球研講演室)

地球研には、世界各地のフィールドで調査をしつつ、日本でもフィールドをもって活動している研究者が少なくありません。今回の地球研市民セミナーでは、まさにそうした研究者の一人、「東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計」プロジェクト研究員の矢尾田清幸さんが「農山村の人とくらし—獣害のようすとその対策」というテーマで講演を行いました。

矢尾田さんは、プロジェクトでの研究のかたわら、農作物野生鳥獣被害対策アドバイザー(農林水産省登録)として、獣害対策の実践にもたずさわっています。講演ではまず、一般の人が野生動物に対していただくイメージとは対照的な獣害被害の大きさについて示し、その問題の深刻さを訴えました。つづいて獣害の現状および対策について、矢尾田さんが関わった京都府下での獣害の事例について紹介。防除がなかなかうまくいかない原因として、シカやイノシシ、サルなどの想定される行動と実際の行動との違いや、電気柵やネットの不十分な設置などの事例を挙げました。そして最後に、獣害低減に向けたアプローチについて、GISなどを利用して獣害情報を地域レベルで作成し、共有・利用する体制を築くことが大事であるとして、話を締めくくりました。

質疑応答の時間は、さながら獣害よらず相談会のように、近隣で家庭菜園を営まれている方がたから地球研の園芸クラブのメンバーまで、獣害防除のための具体的な質問が相次ぎました。私たちの暮らしをとりまく農山村の環境が大きく変わりつつあるなかで、人と野生動物とのつきあい方も模索されています。獣害にまつわるさまざまな言説が飛び交うなかで、正しく問題を把握し、理解、共有することが問題解決の糸口につながります。これはその他の地球環境問題とも通じるもので、身近な農山村の暮らしから環境問題解決のあり方を考えるひとつの機会となりました。(内藤大輔)

研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2013年5月16日～7月15日開催分

開催日	タイトル	主催(プロジェクトリーダー)	開催場所
5月16日	レクチャーシリーズ エコロジー空間2013: 茶室のエコロジー「茶室と景」	村松 伸 京都精華大学建築学科	京都精華大学春秋館
5月19-24日	日本地球惑星科学連合 2013年大会 ブース出展	研究推進戦略センター	幕張メッセ 国際会議場
5月21日	指静脈認証システム FVAS(日立)のフィールド活用についての講習会	研究高度化支援センター	地球研セミナー室
5月23日	レクチャーシリーズ エコロジー空間2013: 茶室のエコロジー「茶と恋」	村松 伸 京都精華大学建築学科	京都精華大学春秋館
5月27日	第2回 水・エネルギー・食料連環プロジェクト研究会 「社会ネットワーク分析で読み解く地域環境活動」「小水力と地域・環境」	谷口真人	地球研セミナー室
5月28日	第1回 基幹研究ワークショップ	研究推進戦略センター	地球研講演室
5月30日	レクチャーシリーズ エコロジー空間2013: 茶室のエコロジー「茶室を創るII」	村松 伸 京都精華大学建築学科	地球研講演室
5月31日	第5回 アフリカ開発会議(TICAD V)公式サイドイベント 「アフリカの将来を語り合う——フィールドワーカーが見た等身大の日常から」	田中 樹	パシフィコ横浜 アネックスホール
5月31日	第1回 舟川 ISセミナー-熱帯農業三大陸比較: 「熱帯農業における近代化と環境問題——三大陸比較の視点が生み出すもの」	舟川晋也	京都大学農学部総合館
6月1日	東海大学海洋学部特修ゼミ・エリアケイバリティプロジェクト研究会 「石西礁湖におけるサンゴ礁の保全と利用」	東海大学海洋学部 石川智士	東海大学海洋学部
6月6日	レクチャーシリーズ エコロジー空間2013: 茶室のエコロジー「茶室と光」	村松 伸 京都精華大学建築学科	京都精華大学春秋館
6月10日	第34回 中国環境問題研究拠点研究会「グローバル化と中国環境問題」	窪田順平	地球研セミナー室
6月11日	第2回 基幹研究ワークショップ	研究推進戦略センター	地球研講演室
6月13日	レクチャーシリーズ エコロジー空間2013: 茶室のエコロジー「茶室と壁」	村松 伸 京都精華大学建築学科	大徳寺玉林院
6月21日	第3回 水・エネルギー・食料連環プロジェクト研究会「大分県日出町の名水と海底湧水そして城下カレイ」	谷口真人	地球研セミナー室
6月22日	愛媛大学-地球研共同国際シンポジウム「地球環境の未来を考える——科学的な評価と問題解決への道筋」	愛媛大学 嘉田良平	愛媛大学理学部講義棟
6月22-23日	中塚 FS研究会「先史・古代史グループ、古気候学グループ、気候学グループ2013年度第1回合同研究会」	中塚 武	地球研セミナー室
6月25日	ENVI/SARscapeセミナー	研究高度化支援センター	地球研セミナー室
6月28日	北東ユーラシア研究会	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
6月28日	第2回 舟川 ISセミナー-熱帯農業三大陸比較:「熱帯地域の農業商業化の進行と持続的農業生産システムの確立」	舟川晋也	京都大学農学部総合館
7月2日	砂漠化プロジェクト 第1回 南アジアの生業(なりわい)研究会「ムンダ人の農耕文化」	田中 樹	地球研セミナー室
7月5日	第88回 地球研セミナー「Breakthroughs in Eco Health and Transdisciplinary Research through Participatory Public Policies in Laguna Lake Watersheds in the Philippines」	地球研	地球研セミナー室
7月9日	第3回 基幹研究ワークショップ	研究推進戦略センター	地球研講演室
7月10日	平成25年度 第1回 国際研究動向調査報告会	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
7月11日 -11月5日	企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」	国立民族学博物館 地球研	国立民族学博物館本館 企画展示場
7月12日	第7回 アジア農村レジリエンス研究会	阿部健一 二宮生夫(愛媛大学)	愛媛大学農学部
7月13日	エリアケイバリティプロジェクト環境班セミナー	石川智士	大阪研修センター



出版物紹介

『HUMAN——知の森へのいざない』vol.04

人間文化研究機構監修 2013年6月
平凡社 定価1,500円+税

「巨大古墳と王権」を特集し、国家形成に向かう列島の足音を聞く。地球研の佐藤洋一郎教授が稲作について述べ、3～5世紀の気候変動についての論考も掲載されるなど、背景となる自然環境についても触れられている。



『統合知の形成をめざして——地球研 研究推進戦略センター 5年6か月の軌跡』

Towards Consilience of an Environmental Humanities of the Earth System
RIHN, CCPC 2007-2013

発行 総合地球環境学研究所
研究推進戦略センター 2013年3月

2013年3月、地球研の研究推進戦略センター(CCPC)は発足から5年半で幕を閉じた。4月から新たな研究推進戦略センター(CRD)と研究高度化支援センター(CRP)とに二分化し、新体制で動き出している。本書はCCPC時代5年半の活動を総括し、記録したものである。
※書店販売はしていません。所内で閲覧いただけます。下記までお問い合わせください。

●問い合わせ先 地球研
TEL: 075-707-2100(代)
FAX: 075-707-2106
E-mail: info@chikyuu.ac.jp

招へい外国人研究者の紹介



HENNY CYNTHIA
ヘニー・シンティア

●所属プロジェクト
メガシティが地球環境に及ぼすインパクト——そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案

●招へい期間
2013年4月1日～2013年8月31日
●現職 インドネシア科学研究院
陸水学研究所上級研究員
●専門分野 環境工学



WIDODO JOHANNES
ウィドド・ヨハネス

●所属プロジェクト
メガシティが地球環境に及ぼすインパクト——そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案

●招へい期間
2013年5月1日～2013年7月31日
●現職 シンガポール国立大学設計・環境学部准教授
●専門分野 建築史

研究連絡誌『SEEDer』(シーダー) 地球環境情報から考える地球の未来



『SEEDer』編集委員会
(編集長 秋道智彌)
2013年3月 昭和堂
定価1,500円+税

第8号 特集 アフリカ開発支援——新たな糸口を探る
研究者や実務者からみたアフリカ開発支援の課題と今後の取り組みの糸口を探る。

研究活動の成果

詳しくは地球研HPをご覧ください。 <http://www.chikyu.ac.jp>

受賞

**地球研研究プロジェクト
「砂漠化をめぐる風と人と土」から
リーダーと3名の研究員が
受賞しました**

**清水貴夫プロジェクト研究員
アフリカ教育研究フォーラム**

優秀研究発表特別賞を受賞(2013年4月13日)

同日に開催された第11回アフリカ教育研究フォーラムにおける清水研究員の研究発表課題「西アフリカ内陸部の『伝統』教育としてのクルアーン学校[その1]:ニジェール共和国ファカラ地方の事例より」に対して授与されました。



清水貴夫
プロジェクト研究員

**石本雄大プロジェクト研究員
日本沙漠学会フォーラム**

ベストポスター賞を受賞(2013年5月25日)

広島大学で開催された日本沙漠学会第24回学術大会における研究発表課題「半乾燥熱帯ザンビアにおけるセーフティネット——携帯電話活用の事例」(共同研究者:宮寄英寿、田中樹、梅津千恵子)の研究代表である石本研究員に対して授与されました。

人事異動

平成25年7月1日付け
【採用】高木 映(研究推進戦略センター
特任研究員(特任准教授))

オープンハウス準備中



験したり……。小学4~6年生を対象としたキッズセミナーもあります。本誌をお届けするころにはオープンハウスは終了していますが、当日のようすは次号で報告予定です。(編集室)

編集委員 ●阿部健一(編集長)/田中 樹/鞍田 崇/寺田匡宏/菊地直樹/熊澤輝一/林 憲吾/内山愉太
バックナンバーは <http://www.chikyu.ac.jp/archive/newsletter/index.html>

**田中 樹准教授(プロジェクトリーダー)
国際開発学会 優秀ポスター発表賞を受賞
(2013年6月8日)**

同日、宇都宮大学にて開催された国際開発学会第14回春季大会における、研究発表課題「作物収量の向上と風食抑制を同時に成立させる砂漠化対処技術とその普及」(共同発表者・伊ヶ崎健大<首都大学東京助教>)に対して、国際開発研究において独自の意義が認められ、その優れた業績に対して授与されました。

**佐々木タ子プロジェクト研究員
国際開発学会 優秀ポスター発表奨励賞を受賞
(2013年6月8日)**

田中准教授と同じく国際開発学会第14回春季大会において、研究発表課題「西アフリカ・サヘル地域の村落における社会ネットワーク構造と女性世帯の生存戦略」(共同発表者・田中樹)が、西アフリカ・サヘル地域の村落における社会ネットワークの構造を現地における丁寧なフィールド調査により明らかにし、さらに社会ネットワークのなかである種隔絶している女性世帯に焦点をあて、彼女たちの置かれている状況や生存戦略を解明した点が高く評価され、今後の研究のさらなる発展を期待して授与されました。



石本雄大
プロジェクト研究員



佐々木タ子
プロジェクト研究員

編集後記

日本三大祭りのひとつである祇園祭を終え、京都に本格的な夏が到来しました。今夏も地球研では夏恒例のイベントとなりましたオープンハウスを開催します。今回は9つの研究プロジェクトがさまざまな企画を用意してみなさんをお待ちしています。研究者と語りあったり、クイズにチャレンジしたり、実

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
隔月刊
Humanity & Nature Newsletter No.43
ISSN 1880-8956

発行日 2013年7月31日
発行所 総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話 075-707-2100(代表)
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp
URL <http://www.chikyu.ac.jp>



編集 定期刊行物編集室
発行 研究高度化支援センター(CRP)
制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。